

しあわせ

「幸福の王子」 オスカー・ワイルド

ゆうきひろし

翻訳・結城浩

「あなたはどなたですか」 ツバメは尋ねました。

「私は幸福の王子だ」

「それなら、どうして泣いているんですか」とツバメは尋ねました。「もう僕はぐしよぬれですよ」

1

「まだ私が生きていて、人間の心を持っていたときのことだった」と像は答えました。「私は涙

というものがどんなものかを知らなかった。と

いうのは私はサンスーシの宮殿に住んでいて、

そこには悲しみが入り込むことはなかったから

だ。 昼間は友人たちと庭園で遊び、夜になると大広間で先頭切ってダンスを踊ったのだ。 庭園の周りにはとても高い塀がめぐらされていて、私は一度もその向こうに何かあるのかを気にかけたことがなかった。 周りには、非常に美しいものしかなかった。 廷臣^{ていしん}たちは私を幸福の王子と呼んだ。 実際、幸福だったのだ、もしも快樂が幸福だというならば。 私は幸福に生き、幸福に死んだ。 死んでから、人々は私をこの高い場所に置いた。 ここからは町のすべての醜悪なことを、すべての悲惨なことが見える。 私の心臓は鉛でできているけれど、泣かすにはいられないのだ」

「何だって！」「この王子は中まで金でできてい
るんじゃないのか」とツバメは心の中で思いまし
た。けれどツバメは礼儀正しかったので、個人
的な意見は声に出しませんでした。

「ずっと向こうの」と、王子の像は低く調子のよ
い声で続けました。「ずっと向こうの小さな通
りに貧しい家がある。窓が一つ開いていて、テ
ーブルについたご婦人が見える。顔はやせこけ、
疲れている。彼女の手は荒れ、縫い針で傷つい
て赤くなっている。彼女はお針子をしているの
だ。その婦人はトケイソウの花をサテンのガウ
ンに刺繍しようとしている。そのガウンは女王
様の一番可愛い侍女のためのもので、次の舞踏
会に着ることになっているのだ。その部屋の隅
のベッドでは、幼い息子が病のために横になって

いる。熱があつて、オレンジが食べたいと言っている。母親が与えられるものは川の水だけなので、その子は泣いている。ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメさん。私の剣のつかからルビーを取り出して、あの婦人にあげてくれないか。両足がこの台座に固定されているから、私
は行けないのだ」

この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0

国際 ライセンスの下に提供されています。